
死んでも守るから…

悠樹☆優樹菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死んでも守るから…

【Nコード】

N4331L

【作者名】

悠樹☆優樹菜

【あらすじ】

突如、入ってきたニュース。感染すれば致死率100%
世界中がパニックに陥る

そんな中、日本各地で次々に起きる連続殺人事件…

本当の味方は…

裏切り者は…

被害者の関係が見えない無差別殺人。だがその裏にはあの組織の存在が：

そして、細菌はついに日本に：

感染の恐怖が迫る：

作品のアドバースや何か足したい人物や事件がありましたらお手数ですが感想覧によりしくお願いいたします。

※不定期更新です。有りえんくらいのグダグダ感が時たまですw
場面切り替えめっちゃ多いです（汗）ちみちみと色々書くので漫画でページくらいのところを半端なく長々書く時ありますw↑読んで飽きる可能性大です！

それでもよろしければ読んでやって下さいm（　　）m

この小説は優樹菜の方が書いてます。

始まり(前書き)

連載中がいつぱいあるのに。よくもまあ、また新しいのを…

すいません…

始まり

『ニュース速報』

突然、表示されたその文字。珍しい事ではない。

しかし、番組が中断されアナウンサーが読み始めた瞬間、おそらく誰もが息を呑んだだろう。番組を中断する事はめったにない。せいぜいテロップだ、よっぽどの事があったのだろう。

読み終わると同時に誰もが動きを止めた。日本だけでは無い。世界中の全ての人間が…この瞬間、恐怖に刈られたのだ。

『えー番組の途中ですが、ここで今入ってきたニュースをお伝えします…今日、日本時間午後2時頃アメリカで化学物質を運んでいた輸送機が墜落。乗務員3人が死亡』

これだけなら、何も起こらなかった。しかし…

『墜落機に積まれていた細菌の一部が、墜落前に落下し、細菌がばらまかれた模様です。この細菌は感染力が非常に強く、感染すると1週間以内の致死率は100%近くであり、現在この細菌のワクチン、効血清はまだ開発されておらず、人から人への感染、接触感染、空気感染が確認されました。現在までの死亡者はまだ出ていませんが、感染者数は1500人に登っています。…繰り返しお伝えします…』

1週間以内の致死率、100%。こんなことを聞いて誰が平然としていられるだろう。ワクチンも効血清も開発されていない。つまり感染すればほぼ間違いなく死ぬと言われたようなものだ。しかも接触感染、空気感染が確認されたと言うことは、感染者が一人居れば、あっという間に広がる。

今は、アメリカだけだがいつ他国に感染者が出てもおかしく無いのだ。

しかし、これから始まる本当の恐怖に比べれば、まだ序章にすぎないのは明白な事だった

1. 小五郎の小遣い

「蘭ねーちゃん、お風呂あがった…よ?…」

「もお! おとーさん! これで何本目だと思ってるの!?」

ドアを開けた瞬間コナンの耳に入って来たのは蘭の怒鳴り声。その原因はおそらく一つ…。

あの男だ…

「うるせえー! 今日はヨーコチュアンの退院祝いだ! 子供は黙ってろ!」

(何が退院祝いだよ…いつも飲んでんじゃねーか…)

そう、この男。

べろべろに酔っ払い、テレビに写るアイドルを見ながらニヤケル姿ほど情けないものは無い。

その上、大量のビールの空き缶。蘭が怒るのも無理は無い。だが…いつもとは比べものにならない程、山積みの空き缶。いつもならとつくに蘭に止められているはずの量だ。しかし、今日は違った。蘭が何度注意を促してもさっきからあの返事ばかりだ。あの返事とわだ…

先月から体調を崩し休んでいた沖野ヨーコが約一ヶ月ぶりにテレビに出たのだ。その上、夕方からずーと『沖野ヨーコ復活特番』がやっている事もあり蘭が帰ってきた頃にはもうべろべろだった。確かに、沖野ヨーコの大ファンである小五郎にとっては最高の話したが、周りにとってはいいめいわくである。そしてついに蘭が強行手段に出た。

「あっそ、これ以上飲むんだったらこっちにだって考えがあるは…」

「ヨーコチュアン」

蘭の言葉など小五郎の耳には届いていなかった。
が…！

「今月と来月、再来月のおとーさんのお小遣いから今日飲んだお酒代と…こ・れ・か・ら！飲むお酒代は全てお小遣いから引きます！」

「…？…」

今まで聞く耳も持たなかった小五郎だがさすがにお金が絡むと話は違う。ただでさえ少ない小遣いから今日、自分が飲んだこの大量の酒、さらには、これからは飲んだ分だけ小遣いから料金を引かれたりすれば一体いくら残ると言うのか。

「それと！」

「まだあるの…」

「何か言った！？」

「いや…」

（蘭のやつ本気だな…）

蘭の怒りは壮絶なものだった。到底、鎮まる様子は無い。それどころか蘭の背景に炎まで見えて来る勢いだ。父親と言えども今の蘭に反抗しようとは思わないだろう。

「お小遣いはしばらく半分カットさせてもらいます」

「なーにー!？」

きっぱりと言い切った蘭の横で重たーい空気の中沈む小五郎だった…

「せめてお酒代は…」

「ダメ」

「ガクッ…」

（ハハハ…これに懲りて少しは酒を控えるんだな…）

2. 突然のニュース

「どお？コナンくん、おとーさん少しは反省…」

「ギャハハハ！ヨーコチュアンにはこの毛利小五郎が…」

「していないみたいね」

ポキポキッ！

少しは反省しているかと思えば、それどころか明らかにさっきよりビール缶が増えている。

「ちよつと…おとーさん…」

「あ？何だ」

バキバキバキッ！

「ら、蘭ねーちゃん…？」

「さっきより空き缶、増えてない？…」

怒りを堪えながら聞く蘭の顔は明らかに引きつっている。

「あ？気のせーだろ」

「気のせえ…。そんなわけ…無いでしょ…！」

「ゲッ…」

適当な答えについに蘭の怒りが頂点に達し、大荒れになることを確信した時だった

「あ？なんだ？」

そう言いテレビに近づきテレビを二、三回ポンッポンッと叩いた。突然画面が消えたのだ。その様子を見て蘭の気もテレビに向く。

「何？停電？」

「そうじゃねーか」

「違うよ」

あっさり否定された。しかも小学生の子供にだ。

「消えたのはテレビだけみたいだし、それに、電源は点いてるみたいだよ。多分、画面が写らないだけだよ。」

「んじゃあ、故障だろ」

「それも無いと思うよ」

またあっさり否定された。さすがに小五郎の表情も曇る。

「なんでお前に、んなことわかんだよ」

「だってこのテレビ、この間おじさんが買い換えたばかりだよね」

「あ、そうだった…」

テレビを買い換えた張本人が見事に忘れていたのだ。

「じゃあ、どうして…」

「きっと、ニュース速報だと…」

コナンの言葉と同時に画面に写ったのは沖野ヨーコではなくスーツを来たニュースキャスターだった。

それもキャスターの後ろではスタッフが慌ただしく動き回っている。ただ事では無いのは確かだ。

「どーなってんだ!？」

「確かおとーさんが見てたのって沖野ヨーコさんの番組じゃ…」

「ニュース速報だよ…」

「ニュース速報？」

「うん…」

コナンの表情はさっきまでとは明らかに違った。まだニュースを読み始めた訳でもない。しかし、今から読まれるニュースがどれだけ重大な事かコナンには理解できた。いくら速報と言っても情報を提供するにあたって冷静さが重要とされるニュースでこれほどまでに慌ただしく動いている事じただ事では無いことを表している。

「じゃあ、ヨーコチュアンの番組は…」

「多分、後日改めて放送するか、もしくはこのままここで終わりか、

だね」

「ガクッ…」

本日二回目。

これから読まれるニュースがどれだけ多くの人間の人生を狂わす事になるか…この時…誰が予想しただろう…大切な者を失う事を…

『えー番組の途中ですがここで今入って来たニュースをお伝えします…今日、日本時間の午後2時頃…』

3. 同盟国の混乱(前書き)

めっちゃ亀です。。。

しかし!・・・がんばります

3. 同盟国の混乱

―翌朝―

『…現在ニューヨークでは混乱が続いており…』

パチ

「つたく…どの局もこればっかじゃねーか」

朝から不機嫌な顔でグチグチとテレビに文句を並べる男。朝からここまで不機嫌な事はめったに無い。しかし今日は荒れていた。理由の一つ。わかりやすい事だった。原因は今朝からテレビで流れているニュースにあった。昨日の夜、ニュース速報が流れてからと言うものの、どの局でも早朝から特番が組まれ普段やっている番組、コーナーも全て中止になった。その中に小五郎が毎朝欠かさずに見ていた沖野ヨーコの4分クッキングもあったのだ。小五郎にしてみれば当然面白く無い。しかし朝からグチグチと小言を聞く身にとっては当然心地よい物ではない。

「仕方ないよ」

小五郎の小言を阻止するように口を挟んだのはコナンだった。

「ああ!？」

突然の言葉に小五郎の苛立ちが増す

「仕方ないってなにが仕方ないってんだ!朝っぱらから同じニュースばっか読みやがって!こっちは迷惑してんだ!」

そう言う言葉に続けて小五郎の顔には俺はヨーコちゃんの4分クッキングが見たかった、と確かに書いてあった。むきになった顔を見るなりコナンと蘭の顔には呆れ以外の選択肢などなかった。

（迷惑してんのはこっちだよ…おっちゃん）

普通なら理解出来る事だろうが今の小五郎にとっては細菌がばらまかれようが断然ヨーコちゃん優先なのだ。その小五郎をみながら後ろで二人が深い溜め息をついていた事は言うまでもない。

だが小五郎も気にしていない訳ではなかった。文句を言いながらも一度は消したテレビのリモコンを手を持ち電源を入れた

パチッ

『…ニューヨークの病院では、感染患者の隔離や対応におわれている模様です。現在も感染者数は増え続けており・・・』

相変わらずテレビでやっているのは、墜落機からばらまかれた細菌の事。感染者が増え続けているアメリカではパニックが起こっている。「外出は緊急時以外控えて下さい」と言う政府の言葉は届くはずもなく街中では夜中にも関わらず、どの道もアメリカから抜け出そうとする車で大渋滞が起こり接触事故も多発していた。更に、逃げ出した家の金目の物を狙った空き巣が増えていた。呆れたものだ。こんな緊急事態にも関わらずよくもそこまでやれるものだ。警察も出勤していたが、アメリカは夜中。最低限の人数を残してはいたが今回ばかりはどれだけ目を配ってもなに一つまともに防ぐことなど出きるはずもなく、ほぼ無力な状態だった。

かつて。これほどまでに大国アメリカが死の恐怖に追いやられた事がいったいどのくらいあるか。

アメリカに住む2億6000万人近くもの人間を救うことは、確実に不可能な事だ。ワクチンも無く感染を防ぐ手立てすらまだわからない。一番は感染してから軽い発疹が出る以外健全者と全く変わりはない事だ。

これが、感染が拡大する最も大きな理由かもしれない。いや。おそらく、間違いない・・・

感染の拡大。

パニックの広まり。

特にそれがアメリカで起きたこと。

どの国でも

幅広い面で支障が出る事は、把握していた。

もちろん、日本も同様だ。

政府はもちろん直ぐに対応に出た。

それは、貿易相手と言う理由もあるが

やはり1番は

同盟国

だということだ。

3. 同盟国の混乱（後書き）

ありがとうございました！

4. 組織（前書き）

亀投稿ですいません！

今回は意味不な内容ですがヨロシクお願いします。

4. 組織

ニュース速報が流れた次の日、小五郎以外にもこのニュースに苛立っている男がいた。だが、小五郎とは全く別の理由だ。その男の目は鋭く殺気に満ち溢れ、全身黒一色に身を包み男がカチャカチャと手元で音を鳴らしているのは拳銃。その様子を横で見ているのは恐らく男の側近であろう、これまた男。その男は拳銃を手にする男の顔にゆっくりと目を向け、一瞬息を止めたかと思うとゴクリと大きく息を呑んだ。それから恐る恐る口を開け一言

「兄貴・・・」

それだけ言った。辺りにはなんとも言えない空気が漂い拳銃のカチャットという音だけが響く。口を開いた男の額からは汗がにじみ、徐々にそれは頬を伝い床にピタツという音を響かせた。そしてそれと同時に男の横スレスレに小さな弾が風を切った。そして彼の後ろにある一枚の写真に穴を開けた。

「フツ・・・。厄介な置き土産を残してくれたものだ・・・」

穴の開いた写真に写っているのは男女数人。そして男が放った銃弾は写真に写るある男の頭だけをきれいに打ち抜いていた。男は銃をしまい、自分の横に漠然と立つ男を睨み付け続けて言葉を並べた。

「ウオッカ。ベルモットを呼べ」

男が続けて呟いた酒の名前。最初に言ったウオッカと言う言葉で側近であろうあの男が動き出した。そしてもう一つ、ベルモットと言う言葉に反応した者がいた。

「あら、私ならここにいるけど？ ジン・・・」

そう言って奥から現れたのは長い金髪の髪を持つ女。そしてその女が呟いたジンと言う言葉に反応したのは殺気を出し苛立ちを隠せないでいるあの男だった。

4. 組織（後書き）

読んで頂いてありがとうございました！

短くてごめんなさい！

5. 蠹(ウゴメ) く黒い影(前書き)

久しぶりの更新本当に申し訳ありません m
〔
m

5. 蠢（ウゴメ）く黒い影

「いつからそこにいた…」

ジン。そう呼ばれる男の声は冷たく、鋭く尖った針のような瞳。彼のもたらす雰囲気は風すら黙らせるようなそんな気配だ。

「貴男が気付かないなんて…やっぱり動揺してるのかしら？ 貴男が犯してしまった…」

パン！！！！

笑みを浮かべ、たんたんとした口調で男をからかうかのように発した言葉は男の苛立ちを増幅させた。

「黙れ」

言葉と同時に部屋には銃声が響いた。
暫くの沈黙の次に女は一言

「ミスを…」

女の言葉に先ほどまでとは明らかに男の表情は違っていた。
殺気に満ち溢れていた雰囲気はどこかに動揺を隠し切れないでいる。

「安心して。ボスには暫く黙っててあげるから」

見た事の無い男の様子に笑みを浮かべ女は
その場から立ち去った。

立ち去る後ろ姿を睨み付けジンは小さく舌打ちをならした。

5. 蠹（ウゴメ）く黒い影（後書き）

読んでいただきありがとうございます☆

短文すみません（；^ ^A

6. ロスからの訪問者

ピリリリリ…

地下駐車場に携帯音が鳴り響く。10秒ほど鳴った所で持ち主は静かに携帯を開いた。

「それで…」

持ち主が発した第一声はまるでこの電話を待っていたかのような、かかってくる事がわかっていたかのようなそんな言葉だった。

『あなたの言った通りよ…』

ツーツー…

相手と交わした言葉はたったそれだけだった。相手の返事を聞き持ち主は携帯を閉じ薄笑いを浮かべた。

手にあった携帯をスーツのポケットにしまい持ち主は車に乗り込んだ。

ハンドルを握った持ち主は一言呟きアクセルを踏んだ。

―毛利探偵事務所―

相変わらずテレビで流れているのはニュース。内容はもちろん“あ

れ”だ。

事務所内に同じ情報が何度も流れる。

椅子にもたれかかりリモコンのボタンを押しチャンネルを切り替える小五郎。

だがやはりどの局もやってる内容は同じ。

「ずっと同じニュースね」

無言の事務所で口火を切ったのは蘭だった。

その声にコナンは一瞬間に視線を移した。

その時テーブルの上にある自分の携帯が一定の間隔に点滅している事に気が付いた。

携帯を手を開き画面に目をやる。

そこには

『着信アリ』

の文字。

そのアイコンをクリックする。

そこに出た名前は

(博士? いったい何のようだ?)

着信の相手は博士だった。携帯にうつる博士の番号に電話をかける。呼び出し音が5回ほどなり博士の声がコナンに伝わる。

『おお! 新一』

「何だよ博士?」

『新一に言っておきたい事があってのお』

「言っておきたい事？ あんだよそれ？」

『実はじゃのお…』

博士が話そうとした時

「なっ何？？ 蘭ねえちゃん（汗）」

博士の電話口から聞こえてきたのはコナンが得意とするあの演技だ。コナンがこの演技をする事になった理由はまさしく蘭である。電話をしている姿をじーっと見つめられればコナンも焦るものだ。

「うーうん。コナン君誰と話してるのかなあと思って」

「は、博士だよ。あはは…」

苦笑いをしながら後ずさりしドアノブに手をかけ事務所から外の階段に出る。

蘭が居るとどうも素の状態で話す事は難しいのだ。

「はあ…」

小さくため息を吐き苦笑いを浮かべた。

『おい新一』

コナンの必死の演技を電話越しに待っていた博士がそろそろいいか？と言わんばかりに声をかけた。

「ああわりいわりい…んで？」

ここら辺の切り替えようは見事なものである。

『ああ、実はじゃのおここ2、3日新一の家に誰か出入りしておるよおでの』

博士の言葉に一瞬昂の事が頭をよぎるが1週間前から2週間大阪に行く鍵を預かっていたため昂では無い事はわかった。そうなるか。誰なのか。

一瞬組織なのか疑問にも思えたがすぐにその正体はわかった。

「あゝそお。んで？」

正体がわかったコナンにとってはどおでもいい報告に思えた。

『あゝそおって(汗)組織の奴らかもしれんのじゃぞ??』

コナンのあっさりとした返事に少し戸惑いを見せるがコナンの落ち着き用から組織では無い事は博士にもわかった。

「それは…」

『それは無いわよ』

コナンの言葉を横取りしたのは灰原哀である。

『組織ならもつとばれないように慎重かつ確実にやるはずだから。目が効く工藤君にばれるならまだしもど素人の博士にばれる様なへ

まはしないわよ。それに組織のあの独特な嫌な感じもないし…』

見事に否定された博士の表情は引きつりながらの苦笑いでしか表現できないくらい綺麗にとどめを刺された。

「そゆこと…（苦笑）」

そしてここにももう一人灰原により苦笑いと言う選択肢を与えられた者がいた。

『それなら…』

博士がまさに誰なのかと聞こうとした時だ

「母さん達だよ」

質問を投げる前に答えが返ってくる。それはそれは便利なことだ。余裕をかまし博士の答えをすんなりと答えたコナンだがさすがにこれまででは見破れなかった。

「正解よ」

「えっ（汗）?!」

階段に座り込み博士と受け答えをするコナンの前に現れたのはまさに電話の張本人

「久しぶり。しーんちゃん?」

6. ロスからの訪問者（後書き）

ありがとうございました☆

7. 工藤親子

「かつ、母さん！！！」

階段に座っていたコナンは思わず立ち上がった。電話の向こう側では博士が指で耳を塞ぎ電話口に耳をあてていない灰原にすら筒抜けな声にキョトンとした表情を浮かべている。

「久しぶりね♪新ちゃん」

そういつて階段を駆け上り満面の笑みで愛息子を抱きしめる。その時新一が手に持っていた携帯が落ち電池パックが外れ博士との電話は自動的に切れた。

「離せよ！」

顔を真っ赤にし照れた表情を浮かべたコナンに有希子は

「もお〜照れちゃってえ！可愛いんだから。。」

相変わらずの性格と言えはそうだが抱きしめられているコナンも口では抵抗はするもののまんざらでも無い表情だ。

「んで、いつ帰って来たんだよ」

有希子の熱い抱擁から解放されたコナン：いや、新一の顔はまだ真っ赤なままだが聞いている事はいつもの新一の言葉だ。

「あら、冷たいじゃない？久しぶりに会ったっていうのに」

落ちた携帯と電池パックを拾い上げる小さな新一を見つめ少し拗ねたような顔を浮かべる有希子。これでは正直どちらが子供で大人かわからないものである。

「せっかくの再開でいつ帰ってきたは無いでしょ。」

「それに…」

そう言う和有希子は新一の顔に親指と人差し指を当て

「もう少し愛想良くできないのかしら」

言葉と同時に2本の指で新一のほっぺをぎゅーっとなねった。

「あにすんらよ！」

ほっぺをつねられ言葉の行がズレル。その様子を見た有希子はたまらずふきだした。

「アハハハ！可愛い〜新ちゃん」

新一の顔を見て爆笑する有希子の目からは涙まで溢れ出した。

その笑い声を聞いて探偵事務所の扉が開いた。

「新一のお母さん！」

事務所から出てきたのは蘭だった。コナンのほっぺをつねりながら爆笑する有希子を見て驚きの後に状況を把握できない蘭は苦笑いを

見せた。

「あら…蘭ちゃん…久しぶりね」

笑いながら必死に言葉を発するがどう聞いても途切れ途切れで聞き取りにくいものだ。

「あの…何やってるんですか？」

当然！聞きたくなる質問だ。事務所のドアを開けると自分の幼馴染の母親が幼馴染の親戚の子供の顔をつねり大爆笑。ややこしい構成なうえにぱつと見、意味のわからない光景だ。

「みて、蘭ちゃん、新ちゃんの、この、顔」

有希子のその発言に二人の表情が変わる。蘭とコナンになんともいえない空気が漂う。

「新ちゃんって…」

蘭のその一言で有希子の笑い声はピタリと止まり。それと同時に焦りがこみ上げてきた。自分の発言に気付いたのだ。お得意の演技でごまかそうとしたがああ発言をどう言い換えたら良いのか全く思いつかないのだ。有希子は一瞬コナンにパチパチッと瞬きを見せた。

「新一兄ちゃんに似てるって言いたかったんだよね?!」

有希子の無言の相づちから瞬時にしてコナンは口を開いた。少し強引ではあるが助け舟と言ってもいいものだ。しかしさすがは親子なだけはある行動だ。

「そ、そうなの。この顔」

そう言うともう一度コナンのほっぺをつねり

「この顔。新ちゃんにそっくりで…。新一が小学生の頃、遅くに帰ってきて理由を聞いても答えないからこうやってほっぺたをつねってはかせてたんだけど、コナン君のこの顔を見てつい思い出しちゃって」

出だしこそつまったもののその後といえはお得意の名演技だ。といっても新一のエピソードと言えば事実だ。のため…

（そーいや、んなことあったな…ハハ…）

とのぐあいになんとも言えない感情だ。

暫く沈黙が続く

（このこ勘がいいのよね。このくらいじゃダメだったかしら）

（蘭の奴、結構勘がさえてんだよなあ）

親子そろって思う事は同じだ。そしてなぜか勘のよさを気にするのだ。

そんな親子の不安を裏腹に

「なーんだ！そーですよね！いやだ私変な事考えちゃって！コナン君が新一なのかなって」

笑顔で話す蘭の表情にはどこか悲しい顔が見えた。

（蘭ちゃん…）

（あぶね〜でもばれてねーみてえだな）

ここは親子でも思う事は大きく違った。

蘭が一瞬見せた顔を見逃さなかった有希子は蘭の気持ち痛みほどわかった。それに比べ新一は蘭の一瞬の表情に気がつかなかった。推理ではずば抜けた才能や心理を読み取る事を得意とする新一だが恋愛にたいしては疎いのである。そんな息子を横目に有希子は小さくため息を吐いた。。。

（はあ…こういうところも優作に似たのね…）

7. 工藤親子（後書き）

次話からすこしづつ話を戻します（笑）

読んでいただきありがとうございました。

8. 光の中の漆黒（前書き）

久しぶりの投稿…

すいませんorz

8. 光の中の漆黒

「それで…」

『あなたの言った通りよ…』

ツーツー…

相手の返事を聞き持ち主は携帯を閉じ薄笑いを浮かべた。

手にあった携帯をスーツのポケットにしまい持ち主は車に乗り込んだ。

ハンドルを握った持ち主は一言呟きアクセルを踏んだ。

「どうする？ 工藤新一」

低く重い声が車の中に伝わる。ネクタイを締めなおす姿。この者は

男だ。

ハンドルを握り地下駐車場をあとにする。

暫く車を走らせると後ろから赤くライトを照らし高々と音を響かせる数代の白黒車両。

徐々に車は近づき組織の一員であろう男が乗っている車を抜いて行く。

その時だ。

男の車にザー…と言う音が響き次に聞こえた言葉はこの男の正体を現すものになった。

『至急、至急！警視庁から各局！！杯戸町より場所は不明なるも…』

車に響く無線。この男は警察官である。組織の一員である漆黒の男は光である警察の中に身を潜めているということだ。

無線内容を全て聴き取り当たり前のように無線に手を伸ばす男は

「了解！」

そう言葉を発し助手席にあった正義の象徴と言ってもいい赤いライトを手に取り闇で埋め尽くされた車体に取り付けた。

闇は光までも欺いたのだ。

8. 光の中の漆黒（後書き）

意味不ですね。。。はい…

すいません

9. 再開と目的と挑戦状（前書き）

始めに謝ってきます m (m
すいません！

話が散らかりました（；
|；
）

9. 再開と目的と挑戦状

「それにしても有希子ちゃんがもどってきてるたあ」

事務所のソファ―に座りご機嫌な様子で小五郎は言った。朝のあの不機嫌さはどこにいったのか。有希子を見るなり満面の笑み…エロ顔の男。

「蘭！お茶だ」

有希子にみとれるオヤジ。

「今用意してるからちよつと待って」

そういつて蘭は小さくため息を吐いた。有希子と小五郎は同級生であり友人ではあるが娘の幼なじみの母親でもあるのだ。

そんな相手に鼻の下を伸ばす父親は情けないものだ。

ましてや有希子は人妻であり小五郎自身も別居中ではあるが既婚者なのだ。

もう少し蘭としてはしっかりして欲しい。

「いやあ久しぶりだなあ。有希子ちゃんは相変わらず綺麗で」

「やだあ小五郎ちゃん！褒めても何にも出ないわよ！」

冗談混じりの会話をし久しぶりに会う高校時代の友人との話は盛り上がるものだ。たわいもない思ひ出話にはなをさかせる小五郎と有希子。有希子が話す学生時代の小五郎と英里の話に蘭は釘付けになった。

コナンはというと。

先ほど有希子の抱擁事故で切れてしまった電話を掛け直し博士と会話中。

朝からしつこく聞いたアメリカでの“あの事”を忘れるくらい話し込み気が付けばもう有希子が来て3時間はたっただろう。お昼の12時を回っていた。

「…でね！小五郎ちゃんが」

有希子が話す小五郎と英里の話を楽しそうに聞く蘭。

ピリリリリ…

はなしの途中で有希子の携帯になる。

「ちょっとゴメンね」

有希子はそういつて隣に置いてあったカバンから携帯を取り出した。

「はいもしもし？…あら優作」

電話の相手は夫である優作のようだ。有希子は一瞬優作から電話が掛かってきた理由を理解できなかったが電話を終え目の前に座ったコナンの姿を見て思い出した。

「忘れてた！！！」

何事かとその大声に3人の気が一気に有希子に向く。咄然とする3人と思わず立ち上がった有希子。

驚く3人に苦笑いを浮かべ座っていたソファーにもう一度ゆっくり

と腰を下ろした。

驚いたと言えは3人もそうだが一番驚いたのは電話相手の優作だ。
有希子の声に驚き優作が椅子からひっくり返り転んだのはここだけの話し。

「ゴメーン優作！すぐ帰るから待ってて」

そういつて電話を切りそそくさと携帯をなおし鞆を肩にかけ立ち上がった。

「えっ？あのお？…」

急な有希子の行動に蘭は何と言えはいいのかわからない。

「ごめんね蘭ちゃん。話の続きはまた今度」

そういうとコナンを持ち上げた。

「え？な、何？」

「コナン君の事2、3日借りるわよ？」

動揺するコナンにめもくれずその言葉と同時に事務所を飛び出した。
有希子が開けた扉がボタンと閉まり蘭は

「はい…」

とキョトンとした顔で返事したが既に二人が出ていったあとだ。

「何だよ急に?!」

突然わけも聞かされぬまま強引に有希子に連れ去られたコナンは身動きも取れないまま母親によって車に乗せられた。

「どこ行くんだよ?」

「シートベルトして!」

新一の言葉はスルーされ渋々シートベルトを手前まで引っ張りはめ込もうとした時、車は急発進。手前まで引っ張って来たシートベルトは新一の手から離されスルスルつと勢い良く戻り新一はと言うと思いつきり座席に体を打ち付けていた。それを横目で見ていた有希子は

「だからシートベルトしなさいって言ったでしょ」

そう言ってパチリとウィンクを見せた。新一は座席に打ち付けた頭を左手で押さえ体を捻らせて右手でもう一度シートベルトを掴み手前まで引っ張るそしてはめ込もうとしたが…

キキッー!!!!

と言う高い音を出し車は急停車。

「もお、何で赤に変わるのよ!」

と悔しそうにハンドルを叩く。そういえば車のブレーキ音と一緒にバコッという鈍い音が聞こえた事を思い出し、なんとなくに自分の

息子が座る助手席に目をやる。

「どうしたの?! 新ちゃん?」

そこには頭に赤いこぶがはつきりと浮き上がり座席の前に逆立ち状態の息子となぜか開いているグローブボックス。

こうなった理由はこうだ。

シートベルトをはめ込もうとした新一だったが、有希子がギリギリ通ろうとした信号が赤に変わり急ブレーキ。シートベルトを固定できてない新一は慣性の法則により等速直線運動が働く。見事にグローブボックスに頭を打ち付けそのまま座席から落下。

頭を打った衝撃でグローブボックスが開く。

よってこの状況ができたのだ。

新一は体制を立て直し座席に座り今度はしっかりとシートベルトを締めた。ゴメンと手を合わせ謝る有希子に安全運転しろよなと素っ気なく言葉を返す。

ふと窓から外に目をやるとマンシヨンの前に見慣れた車が停まりそこから左右数十メートルにわたり救急車両やパトカー、赤ランプを点灯させる警察車両が並ぶ。このマンシヨンと言えば先月杯戸町にできたばかりでニュースにも取り上げられた超高層マンシヨンだ。

どっかのお偉いさんしか住めない値段だと小五郎がぼやいてたのを思い出す。

そんなマンシヨンで一体何があったのか。

気にはなったが信号が変わり走りだした車から飛び降りる事はできない。

それにあの見慣れた車があると言う事は勿論あの刑事も居るのだろう。後日聞けば教えてくれるだろうな。と考える新一。どこまでも事件に関わりたいうのだ。

そんなこんな考えてるうちに寝てしまったのか、目が覚めた頃には夕方。にも関わらずまだ車を走らせている。
寝起きの目を擦りながら見覚えの全く無い街を走る車。

「ここ何処だよ？」

寝起きのせいもあり少し擦れた声。

「さあ何処でしょう」

そう言う和有希子は片手をハンドルから離し隣にある自分の鞆に手を入れ一枚の封筒を取り出し新一の前に差し出した。

「なんだよこれ？」

「挑戦状」

新一の問いにさらっと言葉を返した有希子。

「挑戦状？」

「そう。差出人は不明。でも貴方の正体を知ってる。貴方が工藤新一だと言う事を…」

有希子の話す内容に新一の動きが止まる。

「手紙によると18時、午後6時までにJ〇〇（ジェー〇ール）大阪駅に行き、環状線に一人で乗れ。だそうよ。内容レベルの低さに悪戯かと思ったけど新ちゃんの名前が書いてあったし…もしかしたらって可能性もあるからね。わざわざ私が大阪まで新ちゃんを送るの

は優作からの助言。まあ実際はただ単に貴方が心配なだけなんだろうけど」

言葉が終わると同時に車は駅の前で停まった。

《新大阪駅》

「とりあえず2、3日で用は済むらしから」

「え？」

「用件が済んだら帰してくれるみたいよ。あと…はい」

車から降り改札で大阪までの切符を買い改札口で有希子は新一にあるものを差し出した。

「ホテルのチケット？」

よそうだにしてなかった物に思わず声を出す。

「封筒に入ってたの。ご親切にも2泊分のVIPクラスの部屋よ」

それを手に全く訳の分からないまま新一は改札に切符を通した。その後ろ姿を見つめる有希子は

「大きくなったなあ…」

と呟いたが

どう考えても小さくなっただろ…

9. 再開と目的と挑戦状（後書き）

最後いらないですよねφ（．．；）

どうしても何かしら突っ込みたかったです。
おおめにみていただけたら：

読んで頂きありがとうございます！

10. 鳴り響く電話（前書き）

なんか思ったら毎回場面変わってますね…

わかりにくい…

すいませんφ（．．；）

10. 鳴り響く電話

「まったく、朝っぱらからたちの悪い事してくれるわよ！」

ピリピリした様子でガタンと音をたて出てきた2本の缶コーヒーを取り出しそれを開け口にする。

まあ、何もなくて良かったじゃないですかと隣で宥める高木。彼の性格上何と言うか物事を良くとらえる名人なのだ。

はあっと一息つき隣に立っている高木にもう1本を

「はい」

と差し出した。

「あ、ありがとうございます」

声はいつもの佐藤だが顔は完全に不機嫌。コーヒーを受け取りペコリと軽く頭を下げ礼を言った。

そもそも佐藤をこんなにも不機嫌にしたのは早朝からの悪質な悪戯だ。

昨晩のニュース速報後から警察に殺到する電話。

「空港を封鎖しないのか？」

「日本に感染者が出た時の対策は？」

正直警察に言われてもどうしようも無い事なのだが各課も鳴っている電話を無視するわけにもいかない。と言うよりは無視してなんと

かできるようなレベルではなかった。早朝に政府が今回のコールセンターを設置するまで、どの課でも警察の電話はなりっぱなし。その為昨日定時に帰るはずだった刑事も帰るに帰れず取っても取っても切れる事の無い電話を取り続け

「いい加減にしろー！」

と、半ノイローゼ状態になった一課を始め警視庁の面々がようやく解放された頃には既に午前6時過ぎ。殆どの刑事がそのまま勤務に入ることになった。眠気から来るイライラは朝から警視庁に充満していた。

しかし警察が勤務を放棄する訳には行かない。それぞれが自らにムチを打ち

事件現場に向かう者

聞き込みに向かう者

張り込みに向かう者

報告書をまとめる者

駐禁の見回りに向かう者

そんな刑事達の導火線に決定的な火をつけ佐藤を不機嫌にさせた原因は一本の電話だ

「杯戸町のどこかに爆弾をセットした。2時間後に爆発する…ツーツー…」

警視庁にかかったこの電話で落ち着いた警視庁はまたもやフル稼働。2時間探しに探した結果、逆探知した公衆電話の近くの防犯カメラに映った男を捕まえた所、悪戯だったと。その瞬間の刑事達の怒りは表し用が無い。

そして通常勤務で落ち着いた今でも警視庁内はピリピリムード。

と今日というか昨日というか、もおよく解らない時間の中で起きた出来事をざっと思いついたただけでため息が出る。

2人してはあゝと大きなため息をつき

高木は捜査一課のドアに手をかけた。

カチャツと言う音を出し高木はドアに力を込め勢い良く開けた。

その中は案の定、イライラと眠気で埋め尽くされドアを開けると同時に高木と佐藤にどんよりムードが押し寄せる。

「おい、高木。早くドアを閉めろ」

力なく高木の耳を通る先輩刑事の声は昨夜からの電話の影響か酷い擦れようだ。

「あ、はい」

先輩からの指示通り佐藤を中に入れるとパタンツとドアを閉じた。それと同時に殺気で溢れた視線が四方八方から高木にささる。

「えゝゝ」

慣れた筈の視線に思わず肩をすくめ恐る恐る後ろを振り返る。

この視線は一体どっちに対してなんだ。

佐藤さんと2人で居たことか？

それともドアを…

振り返るうちにいろいろ考えたが先輩刑事達の顔を見て確信した

ドアを閉めた時の音だ。

なぜならこちらを向く刑事達の顔にははっきりと書いてあるのだ

「頼むから静かにしてくれ」

と。

「あらら、皆ダウンね」

普段ならあり得ない光景に佐藤も思わず言葉を発した。3係の刑事の殆どが机に伏せその体制で仕事をこなしている。なんともみっともないというかだらしが無いというか。

頼むから静かにしてくれと言う切実な刑事達の願いは報われる事無く

プルルルルル：

と高い音が一課全体に響き一瞬にしてしーん：と静まりかえる。電話恐怖症を発症した刑事達は、誰も電話を取ろうとしない。それどころか耳を塞ぎ電話から離れようと一課を飛び出して行く者まででたのだ。

「重症ね。」

（わからなくもない）

ポツリと佐藤が口にした言葉。今飛び出した刑事を見て高木を始め佐藤以外の刑事は声にこそ出さないもののそう思ったのだ。

「まったく捜査1課強行犯3係ともあろう刑事が揃いも揃ってみつともない」

そういう彼女の足は一步一步と音をならす電話に向かって歩き出し受話器を取り対応を始めた。

「す、凄い…」 「美和ちゃんにはかなわねえ…」 「俺にはできない…」

などと何ともまあ口々に出るのは電話で話す佐藤への尊敬。電話にでるだけで尊敬されるとは佐藤も思っていないだろう。というより当の本人は気付いていない。

「わかりました！すぐに向かいます！」

佐藤の相手への返事を耳にした一課のみつともない男共の顔は険しくなり伏せていた刑事達も頭を上げる。佐藤の声質や顔つきから聞かなくてもわかる。

「事件です！」

受話器を置いた佐藤から発せられた言葉についさっきまでみつともなかった刑事達は普段の緊張感を取り戻した。

そこへタイミング良く目暮が一課のドアを開けた。ふとその場にいた誰もがそちらに目を向けた。

「警部！杯戸タワーシティーで事件です。」

紙コップ片手に現れた目暮に今かかってきた事件現場を伝える。目暮としてもやっと一段落しゆっくり休もうと戻ってきた矢先にまた次の事件。

だがそんな事も言ってもらえない。

「よし！わかった！佐藤、高木…」

と捜査に出す刑事の名前を呼び終わると紙コップに入っていたものを一気に飲み干し自らも現場に向かった。

10. 鳴り響く電話（後書き）

ありがとうございました！

11. 再度紛失（前書き）

なんだかなあゝ

佐藤刑事と高木刑事が好きな作者の暴走話に近い話です。

11. 再度紛失

「ここって確か、先月建ったばかりのタワーマンションですよね？」

グッと顔を上げ肉眼では確認することができない頂上があるであろう空を見上げパタンと車のドアを閉じた。

「ええ。超高級のね」

何となく高木が呟いた言葉に“超高級”と言うワードを付け加え目暮の後を追う。マンション前に集った野次馬と情報クレクレ軍団マスコミを掻き分け操作作用の手袋を装着し自動ドアを通り抜け中に入る。

遅れて高木も佐藤と目暮と同じ空間に入るが

「ちょっと…高木君、どうしたのよその格好？」

たどり着いたそうそう佐藤の目に飛び込んだのはここまでくる数メートルの間に何があったのか。

華麗に通り抜けた上司2名とは違い。

ボサボサになった髪の毛

着崩れしたスーツ

なぜか片方しかはめられてない手袋
あろう事か背中にあるネクタイ

「ハハハ…」

高木の喝いた笑い声がマンション内のホールに響く。普段は万全の

セキュリティでオートロックのかかった自動ドアも今は制服姿の警察官によって全解放され無防備に開かれている。

「それで現場は？」

自動ドア前で待っていた捜査員にそう尋ねると足早に現場に向かう。

「はい。このマンションの62階です。」

「「62階？」」

あまりの高さに3人の声が重なる。確かに超高層マンションだと知ってはいたがよくよく階数を言ってみると凄まじい。

いかにも“超高級”なだけはあって高性能なエレベーターだ。おびただしい程のボタンがずらっと並ぶのかと思ったら入力式らしい。30秒程上がった所でエレベーターは止まり、開いたドアから左右に広がる廊下と一直線上にある廊下。その一直線上に繋がる廊下の先には見慣れた黄色いテープが張り巡らされ現場独特の雰囲気を作っていた。

部屋に入るなり玄関、廊下にはおびただしい程の血痕が残されていた。

「警部。ご苦労様です」

リビングに入るなり聞き覚えのある声が3人の耳を通る。佐藤曰く“恋する警部”とのことだ。

「白鳥君？あなた今日は非番なんじゃ…」

そう。佐藤の言う通りに華麗に現れた白鳥は今日は非番のはずなの

だ。その彼がどういう訳か普段見慣れない私服姿でそこに居る。

「ええ、そのはずだったんですが…」

そう言う自分の足下にあったであろう遺体の跡を型どったそこに目を落とし

「親しい友人を亡くした日に…ゆっくり休めそうにはありませんから…」

「親しい友人って…」

そう語る白鳥の切なく少し揺れる瞳を見た佐藤の中でかつて自分があじわった感情が蘇る。

白鳥が見つめる先に佐藤も視線を落とした。

「なるほどな…白鳥君の友人と言うわけか…。それで被害者は？」

何度来ても慣れる事は無いこの暗く悲しい重たい空気が漂う空間はどんな事件にも必ず同じ大ききで付いてくる。今回もその空気が漂い現場にはその人がついさっきまで生きていた証が確かにある。その空気に押される事無く職務を果たすのが刑事というもの。目暮はその職務を果たすためその口火を切ったのだ。

ヤマモトカズノリ

「被害者は…山本一徳。年齢は30歳。職業は弁護士です。死亡推定時刻は午前2時～午前5時の間。左腹部を始め、5箇所を拳銃で撃ち抜かれています。死亡の直接的原因は出血多量による出血死…。第一発見者は僕です。」

「あ、あれ？」

そこまで告げた白鳥の言葉を遮るように高木が抜けた声を発した。

「なんだね高木」

当然その場の人間の視線は高木に集中する。

目暮も何事かと高木に問うが

当の本人はそんな言葉は求めていないようで

上司の問いも周りの視線もそちのけでスーツのありとあらゆるポケットに手をつ突っ込んだかと思うと

おもむろに上着を脱ぎだしバサバサと血痕の広がる現場でスーツをはたきだし

かと思うと「あれ？あれ？」と声を出しながらもう一度胸ポケットに手を入れた。

その様子を見ていた上司3名はまさか？と思いつつもなんとなく感付き始めていた事を佐藤が代表して口にしてみた。

「まさか……無いの？こーゆーの……」

そう言う佐藤の指は四角をかたどっている。

案の定、佐藤のそれを見た高木の顔はみるみるうちに健康とは程遠い顔色に変わっていく。

「ちょっと！嘘でしょ?!」

当たり前だが怒られるのだ。

これ無くすと

とてつもなく不味いのだ。

警察官にとって命の次に大事なのだ。

警察手帳は……

「バカものお!!!」

現場に響く警部の怒声に高木は涙目になり髪の毛は逆立ち佐藤、白鳥は目を丸くして耳を塞いでいる。
さっきまでのあの緊迫感をどうしてくれる。

「最後に見たのは何処なの?!」

朝からイライラしているのにもイライラの発生源が居たのだ。
佐藤はピクピクと眉を動かし今にも爆発しそうなイライラを必死で抑える。

「いや、あの、車を降りた時はあつたんですけど…」

高木の声は正面に居る上司の威圧感に語尾が弱まっていく。

「じゃあ何！？車からこの部屋に来るまでの間に落としたって事？」

その佐藤の言葉を聞いていた目暮は、まったく…と高木に呆れ返り、白鳥はため息を吐きながら片手で頭を抱える。高木はすっかり縮こまり、もお怒りと言うよりは殺意に近いオーラを放つ佐藤にガタガタと音になるんじゃないかと言うくらいに震えというか痙攣^{けいれん}状態で

「た、多分…」

とほぼ口パクに近い声で応答したがそんな声は佐藤の耳には届かず

「えっ！？何？ハッキリ言いなさいよハッキリ！」

「ま、まあ佐藤くん。そう言わんと…高木、現場は我々に任せて警察手帳を…」

「は、はいいい！」

目暮ですら恐怖を感じる今の佐藤をなんとか落ち着かせようとイライラの発生源である高木をその場から遠ざけようと目暮は指示を出した。それを聞いた高木は逃げるようにその場を飛び出した。

11. 再度紛失（後書き）

今回後書き長々書きますw

最後折れました（――）

手抜き感が

でてますよねー（――メ）すいません。。。

因みに題名の再度紛失って言うのは高木刑事

原作かアニメのオリジナルで1回紛失しちゃってるんですよ。

今回はそれを踏まえて

「再度紛失」にしましたw

細菌から始まって警察手帳紛失って何?!

ってなりますが必要なんです紛失がw

しかも殺人現場無視かよ!

白鳥の親友無視かよ!

捜査さっさと始めろよ!

って感じですよね。

紛失のタイミングをここでしか掴めなかった作者の能力不足です。

ホントすいません。。。

最近周りの言われるんですが

「1日経つのに何話かかってんの?」

自分でもこれ気付いてるんですけど細かく書いてしまう癖があるんですよ（――）

同時に何か起こしたり今回みたいにw

3重4重で長くなるw

それでもしぶとく読んでやって下さい！（＜――＞）

次回は大阪が舞台のあれを書きます！

新一君です。挑戦状です。色黒探偵登場ですw

読んで頂きありがとうございます（＾▽＾）

手抜きは今回限りにしますので悪しからずw

毎回読んで下さってる方へ。

毎回読んで頂きありがとうございます。

作者の都合で更新が不定期なうえ、投稿期間が長い間停滞したりと申し訳ありません。

出来る限り投稿できるように努力致します。

こんな小説ですがこれからもよろしくお願い致します。

最初の紛失をご存知ない方は是非

YouTubeで「警察手帳紛失事件」でどうぞ（笑）

12. 西の高校生探偵（前書き）

うわあああああああ！！！！

すごいスランプ。。。。

ホントすいません；；

色黒男しか出せませんでした。。。

内容の工夫も捻りもないし；

しかも；こんだけ溜め込んでいてめっちゃ短いんですよ

はあ；やあばい

こんな小説に文句も言わず読んで頂いてありがとうございます。

では、どぞ；；

12. 西の高校生探偵

「んで…なぁんでおめえがここにいんだよ」

「大阪城公園駅」

駅のホームでその標識に目をやりそのまま横に視線を移した新一はそう口にした

「なにゆーてんねん、それはこっちのセリフや」

壁に凭れかかり帽子を深く被ったその相手は薄笑いを浮かべそう返した。

「服部。まさかおめえじゃねえだろうなあ？」

新一と言葉を交わしているのは西の高校生探偵服部平次。

母親から挑戦状として渡されたそれに一度目を落とし、タイミング良く自分の目の前にいる平次を見上げジトツとした目を向けた。

新一からしてみれば大阪というワードで始めに出て来る人物と言えはこの男だ。挑戦状通りの場所に来てその人物が居たら当然疑うだろう。

「はあ？何のことや？」

だが新一の思惑とは裏腹に平次には全く何の事か理解できていない。

「俺はこの紙に書いてある通りに来ただけや」

そう言って右手をヒラつかせる平次の手にはどこか見覚えのある紙が掴まれている。その封筒はまさしく新一のそれと同じもので、それを確認したと共に平次への疑いは消え、と、同時に呼ばれたのは自分だけでは無い事を確信した。

「ん？ お前その紙…」

平次の視線は新一の手元。それを見れば新一同様名探偵と呼ばれる彼であれば、いやなくてもだいたい予想はつくだろう。

互いにそれぞれの状況がおおよそ同じであることを理解し2人は薄笑いを浮かべる。

「お前もこのくだらん紙を送り付けてきたアホの面^{ツラ}拌みにきたんか？」

「ああ？ どういう意味だよ」

「どうゆー意味で…：おい工藤…まさかお前こんなアホみたいな内容、真に受けとんとちゃうやろなあ？」

どうやら平次はこの手紙を悪戯だと思っている様だ。だが仕方が無いと言えばそうだ。名探偵と呼ばれる彼らに挑戦状と呼ぶには程遠くどちらかと言えば大阪城までの道案内と言った方が正しいのではないかという内容だ。そもそも、挑戦状と銘打っているにも関わらずなんの挑戦もしていないのだから。

「だったらなんだよ」

「工藤おまえちょっとあわんうちにおかしなっただんとちゃうか？」

冷静にそう言葉を返し、平次の言葉には耳も貸さず新一は封筒から紙を取り出す。そしておもむろに

「服部、鉛筆かシャーペン持ってねーか？」

そう言って、まだ返事も返していない平次に貸せと言わんばかりに手を差し出した。だがそんな新一の視線は封筒の中の紙に注がれたままで、まるで悪戯というか道案内のような内容が書かれている紙の裏を親指でゆっくりと何かをなぞるように擦っている。

その様子を見ていた平次も何か気付いたのか自分の胸ポケットに挿してあったシャーペンを取り出し新一に手渡した。

「…なんやそれ…」

新一は平次から渡されたシャーペンで先程までなぞっていたそこに色をつけるように黒く塗り始めた。その様子を見ていた平次からおもわず声がもれた。

「この紙、唯一裏のこの部分だけ不自然な形につるつるしてんだよ」

新一が塗りつぶす紙に姿を現しつつあるその正体。

「なるほどな、鉛筆の粒子をはじくビニールか何かつこうてこれを隠しとったっちゅうわけか」

完全に姿を現したそれを見つめ名探偵2人に思わずニヤリと笑みがこぼれた。

【新たな世界は守閣を背にする】

12. 西の高校生探偵（後書き）

本当に申し訳ないです。。。

13書いてるんですけど…哀ちゃんすごーいありがたいW↑何が？
ですね

また読んでやって下さい^^；

13. 探偵団（前書き）

前のほうが絶対よかった。。。。

一回ミスってけしちやったんです；；

期待せずにぼろぼろの駄文をどうぞ；；

13. 探偵団

「観ましたか？今朝のニュース：」

いつもの様に博士の家に集まった彼らの会話は光彦のそんな言葉から始まった。

「うん：何だか大変な事になってるよね」

不安げな顔を浮かべる歩美は、今朝の両親の会話と何度も同じ事を流すニュースを思い出しそんな事を口にした。小学1年生といえども今回のこの出来事に異変を感じるのは当然だ。それほどまでに世間は混乱しているのだ。

「ええ：何といっても感染後1週間以内の致死率が100%ですもんね…」

と、いつもながら光彦は重要な点をしっかりと突いてくる。

「でもよ！病院行って医者に診てもらえば治るんだろ？」

そして元太は普段どおりずれた意見を自信を持って投げ掛けてくる。しかし小学1年生なのだからそういう子供らしい答えもいいものだ。なんといっても少年探偵団には明らかに子供離れしたのが2人もいるのだから。

そしてその子供離れした1人が口を開いた。

「バカね…。1週間以内の致死率が100%っていうことは、感染後もって1週間以内に効血清をうたなければ確実に死ぬってこと。」

今回問題になっているのはその生死を分ける効血清。テレビでも言
ってたけどワクチンが開発されていないこの状況で細菌に感染した
りすれば1週間という余命宣告を受けたも同然に確実に死ぬことにな
る。普通、細菌の感染致死率なんてほとんどが0%に近い数値。
でも今回は何のバイオ薬品かは知らないけど、細菌の致死率が10
0%で存在してる。ウイルスでのこの数値なら十分考えられるけど
細菌でのこの数値は前代未聞。つまり…もともと致死率が高くない
細菌が100%の致死率をもって存在し、それがこの世の中にばら
撒かれた今、効血清、ワクチンをどれだけ期間で開発できるか…」

彼女の言っていることはまさにそうで、今回一番厄介で問題視され
ているのがワクチンすら無い細菌に全くをもって対策を打つことが
できない事だ。

ただ感染の恐怖に怯えながらワクチン、効血清が開発されるのを待
つことしかできない。

灰原の説明にポカンとした顔でなんとか理解しようとするが、さす
がに難しかったようで…

「あ、あのよ〜なんだ? 『そのちしりつ』とかゆうの。何かの肉か
?」

「あのですねー…元太君。何でそうなるんですか」

さすがにこれはぶっ飛びすぎだが致死率という言葉がこの歳で理解
するのは難しいのだろう。

「歩美も知らない」

「あ、歩美ちゃんもですか?!」

「致死率って言うのは人間が死亡に至るパーセンテージを表す数値のこと…」

パソコンのキーを弾きながら灰原は彼らにそう返した。

「哀ちゃんってホント物知りだよね」

「なんだ…食いモンじゃねえのか」

「だからどうしてそうなるんですか」

灰原の答えに彼らの反応はそれぞれだ。

「そういえばコナン君は？」

ジュースを手にした歩美がストローを口に含もうかという微妙な位置でふと何かを思い出したのかピタリと動きを止めそんなことを口にした。

「コナン君ならさっき蘭さんが2、3日出かけると…」

「でかけるってどこにだよ？」

「そ、そこまでは…」

元太からの鋭い突っ込みに光彦は言葉を詰まらせた。

「また抜け駆けしてんじゃねえか？」

「あ！それ考えられますね！でもなんの抜け駆けですか？」

「それわ……何だ？」

「コナン君どこ行っちゃったんだろ……」

ここでも思うことはそれぞれだがコナンを心配していることには変わりないようだ。

「工藤君大丈夫なの？」

奥の部屋から子機を片手に出てきた博士に灰原は小さく問いかけた。

「ああ、心配いらんよ、蘭君に電話で確認したら有紀子さんと一緒のようじゃし」

「そう……」

灰原が心配したのも無理は無い。昼過ぎにコナンからかかってきた電話を最後に何度コナンの携帯を鳴らしても繋がらなかったのだ。そんなコナンになにかあったのかもしれないと灰原の案で蘭に確認の電話を入れたのだ。そして今その電話でコナンがどうしているのかをやっと確認できたのだ。

だがコナンがどうしているのか、そんなことを知らない彼らは

「もしかしたらコナン君、何かの事件に巻き込まれてしまったのか
もしませんかよ！」

「えっ……!!」

「ま、マジかよ光彦」

と、どう話が血迷ったのか光彦からそんな一文が飛び出した。

「コナン君のことですから僕達を危険な目にあわせないように一人で…」

「そ、そんなのダメだよ！」

「俺達仲間じゃねえか！」

と。大いに想像力豊かな年代の彼らは盛り上がり、同時に彼らの使命感には火がともされ、元太の掛け声と共に博士のうちを飛び出した。

「ちょ、ちょっと！」

灰原のそんな声は届くことなく彼らの足音は遠ざかっていった。

「はあ…つたく」

探偵団が居なくなった部屋で灰原の呆れた溜め息と博士の乾いた笑い声が響いた。

13. 探偵団（後書き）

なきそうだなゝ；；

かけなさ過ぎて：

どう表現していいかわからない。。。。

哀ちゃんは説明役にありがとうございます。はい。

次話は：

ましな文が書けるようになったら……

14. いつかの再現と新たな仲間？（前書き）

オリキャラ出てきますw

この小説に出てくるオリキャラ数えてみたら9人だったっていうww
自分で設定したのにややこしすぎてオリキャラパニックおきてます；

オリキャラ組織のコードネームを公開しときます
カルーア・スコッチ・アマレット
の3人です（笑）

コードネーム考えるの大変だった；；；

とかいう先の話の話は置いといて…

今回もめっちゃくちゃな駄文をどうぞへへ；

14. いつかの再現と新たな仲間？

「刑事部屋に置いてきたとかは無いんですか？」

「車の中は見たの？」

「高木。お前ホントに刑事か？」

「は、ハハハ…」

博士宅から飛び出した彼らはどういう訳かいつかの様に高木のあれを探していた。

2時間前

「まずは蘭さんに事情を聞いた方がいいですね！」

「おう！」 「うん！」

そんな彼らはコナンの行方を捜し毛利探偵事務所まで続く大通りを歩いていた。

そこは普段人通りも多い道。だが

「そういえばよう：なんかいつもより人少なくなええか？」

元太の言ったとおり、日曜で休日であるにも関わらず、店が立ち並ぶこの通りには数人のひと数しか見受けられない。ここまで歩いてくるまでも薄々とは感じていたがさすがに休日にしては人が少なすぎる。

その原因はおおよそ予想がつくこと。昨夜からのあの報道の所為だろう。

「ホントだね」

「そういえば今日は朝からよくパトカーが走ってますね」

あたりを見回す歩美たちは風の音だけが聞こえる道端で足を止めた。彼らの背後から高々とサイレン音を響かせる車両が何台も彼らを横切っていく。その様子をみた光彦が今朝から聞こえたそれを思い出しそんなことを口にした。

「杯戸町の方に向かってねえか？」

「ええ、何かあったんですかね」

サイレン音を鳴らす車両は全て真っ直ぐ杯戸町へ向かっていく。

「多分：杯戸タワーシティーに向かってるんだと思うよ？」

車両を見つめる彼らの背後から突然掛けられた声に3人そろって同じ反応を見せキョトンとはまさにこのことを言うのだろうという表情で後を振り返った彼らの視線の先、そこに居たのはまさに自分達

と同じ歳くらいの少年だった。

「あ、あのー…」

この辺で同じ歳くらいの子は把握していたつもりだった彼らだが、その少年には見覚えが無い。

光彦は自分達の前に立つ少年に声をもらした。

「僕、マキタソウタ牧田総太！」

ニッコリと見せた笑顔でそう告げた総太は自らのズボンのポケットに手を入れるなりそこから取り出した小さな包みを差し出した。

「アメ…ですか？」

小さな手の上に3つつ。

「僕と友達になって！」

そういうと総太は自分の掌の飴玉を1つつ3人に渡し始めた。そんな総太の行動に3人は呆然としていたが「友達になって」の一言で彼らの表情も笑顔に変わり「もちろん」の一言で総太との距離はあつと言う間に縮まった。

そんな彼らの会話は

「俺達少年探偵団やってんだ！」

「少年探偵団？何それー？？」

元太の言葉に瞳を輝かせくいつきぎみに総太は言葉を発した。

「僕達少年探偵団はですねー、今までに数々の難事件を解決してきた訳で…」

「ぜーんぶ！コナン君のおかげだけどね」

自慢げに語る光彦の言葉を遮るかのように歩美はコナンの名を口にした。その横で少し顔を歪める光彦は苦笑いを浮かべた。

「コナン？他にもメンバーがいるの？」

変わった名前に不思議そうな表情を浮かべた総太は今ここにいないその人物が探偵団の一員だと考えそんなことを口にした

「そうだよ！江戸川コナン君と灰原哀ちゃんと私達の5人！」

歩美の言葉を聞き終えると、総太は真剣な顔を向け

「僕を少年探偵団に入れて下さい！」

突然の言葉に一瞬驚いたものの元太達は頭を下げる総太に不適な笑みを向け

「しょうがねえなー」

「入れてあげくはないですよ」

相変わらずの表情でそう言った彼らの顔には何か企んでいます。と書

いてある。

「じゃあ！」

光彦の遠まわしな許可に期待を膨らました総太は明るい顔で顔を上げた。

「ただし！」

しかしそんな総太に光彦はそんな言葉を発し

「試験にクリアしたらな」

とニヤリと元太が続けた。そんな2人に「意地悪はよくない」と歩美の言葉が放たれたが、「探偵団を甘く見られては困る」との光彦の言葉で結局総太は試験クリア後に探偵団入りとなった。

「試験って何すればいいの？」

「そ、それはー…」

正直、何も考えず口にしたのだろう。試験を。言葉を詰まらせる光彦に「どうすんだよ」と耳打ちをする元太。結局何も浮かばなかったのか「後で発表します」と一言告げると

「と、とりあえず探偵事務所に向かいましょう！」

と、うまく話題をかわした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4331/>

死んでも守るから…

2011年11月14日23時16分発行